

5. 監修医および関係者より



食と体重の悩みは我々と一緒に解決していきましょう

監修医からのコメント

今回の調査を通じて、がんに罹患してからの早い段階で、治療経験の有無を問わず多くの患者さんとそのご家族が食と体重に関する悩みを抱えておられることがわかりました。

食べるということは日々の生活を過ごすうえで基本となるものです。この喜びが損なわれることによる、患者さんにご家族の心理面への影響は計り知れません。ご本人、ご家族ともに悩まれ、また、気持ちのすれ違いに辛い思いをされておられることも少なくないでしょう。加えて、食の悩みは体力面にも大きな障害となります。がん治療を続けていくためには体力と体重の維持が重要です。食の悩みを解決することは、心と体の両方においてとても重要なことです。

ただ残念なことに、この度の調査により、悩みを相談しても満足する結果を得られなかった方が多数いらっしゃることも明らかになりました。患者さんの訴えに対して医療者側が耳を傾けてくれなかったという、医療者としては自戒すべきお答えもありました。

悩みの種類は個々のがん種・罹病期間・ステージ・治療法によっても様々であり、その対処法も様々です。そのため、全てを解決するのが難しいことは事実です。ただ、何かしら対処ができる悩みもあります。患者さんの悩みを取り除く、和らげることが我々の使命だと思い、日々診療をしています。抱え込まず、まずは医療者にご相談頂けたらと思います。例え医師だけでは解決出来ない問題であったとしても、看護師や薬剤師、栄養士など、それぞれの専門知識を持った人たちが、あなたが悩みと向き合う力になってくれるはずです。

今回の調査結果がきっかけとなり、一人でも多くの患者さんの悩みがなくなることを切に願います。私たちと一緒に、悩みを解決していきましょう。

京都府立医科大学大学院医学研究科
呼吸器内科学 教授 高山 浩一

関係者からのコメント

食べられなくなり、痩せていく。それは進行がんの患者・家族にとって、自分自身の状況を客観視する指標のようなものかもしれない。自分自身の感覚でわかる。結構残酷なものだ。

私自身は10年の闘病経験を持つ。肺がんのステージ4。その治療の中で体重は20キロやせた。10キロ痩せて、10キロ太り、また10キロ痩せて、10キロ太った。筋トレが趣味だったので、自分の体が脂肪に変わっていくのがまざまざとわかる。おなかのぼっこりでたおじさんになった。気が付くと、空腹を感じることもなくなっていた。「おなかが減る」ことを懐かしく感じる。

でも、もはやそれらはどうでもいいことだ。家族が患者のために、気を使った食事を出してくれること。友人が、「食べられないものは？」と配慮してくれる。そんな経験は、患者を勇気づける。それでいいんだろう、と思う。もちろん、そんな状態を少しでも改善してくれる、支えてくれるものがあるのだとしたら、それはとてもうれしいです。豊かな時間が増えますね。

NPO法人 肺がん患者の会 ワンステップ
理事長 長谷川一男

胃がんでは、診断から治療の日々、全てで食に苦悩を抱える事例が少なくありません。食べられないことで、栄養が採れないのではないかと、そのことが治療に悪い影響を及ぼさないかという不安を、患者本人、家族共に抱えています。また、体重の減少に関しても、敏感になっているケースが多いと思います。

家族は、患者を支えようと、食事作りに懸命になりますが、その想いに応えられないことも患者の心理的負担に繋がり、家族も無力感を感じてしまいます。私は家族の立場でしたが、その苦悩の日々の思い出から数年間、料理を作れなくなりました。

医師、栄養士の方に相談をしても「口に入るものであれば何でも」と言われてしまい、そのことに見捨てられたという想いを抱く事例もあります。『食べることは生きること』と言われますが、病気、治療を受け入れるだけで精一杯の患者家族の心理を理解し、支える医療が届くことを願っています。

認定NPO法人 希望の会
理事長 轟 浩美